

白金葎

7月号



平成 30 年 7 月発行

第 8 9 号

定例会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

九月二十一日（金）第五室正午～三時…露、燕帰る

九月二十八日（金）小名木川畔吟行会中川番所跡資料室

十月十九日（金）第四室正午～三時…山椒の実、下り築

兼題句参考句 九月二十一日分（露、秋燕）

乾坤をのみこんでいる露の玉

子のような地球のような露の玉

ネオン赤き露の扉にふれにけり

ペガサスの大方形や露の上

鈴鹿市の電線などに帰燕群むる

秋つばめ沈下のつゞく滑走路

月例会会報（¹⁸／7／20 10名 蓮見船吟行）

光成高志

東大の赤き領巾立つ蓮の群

日を浴びてO₂^{酸素}の泡を蓮の茎

小鰻刺蓮の葉の上飛び廻る

蓮の葉の裏返り白風の中

花弁のゆるゝ三日の蓮の花

船宿に魚拓揃ひて早雲

蓮酒の酔に絡むや糸蜻蛉

沼にゐて海の匂へり小鰻刺

しらじらと葉を翻し蓮の沖

蓮の葉の錯綜浮巢あるといふ

光 みち

オダ場抜けいよよ加速す蓮見舟

翡翠を船頭ひとり見たといふ

擬宝珠の如き蕾の蓮の花

沖に出て団扇やんまに出合ひたり

散蓮華波間に沈む小舟なり

佐藤宏之助

炎昼の浮棧橋を馳走す

手賀沼に聴くみんなの第一声

象鼻杯ごくごくと飲み昇天す

蓮酒を沼の傾くまで呷る

増田陽一

篤信の人と同舟蓮見舟

船べりに触れんばかりの蓮の花

沼風に裏返る蓮葉遠白く

沼蔽ふ葉かげに蓮華匂ひ立つ

炎天下沼風優し蓮見舟

舟寄せて咲き満つ蓮我がものに

へら鮎の魚拓ありけり蓮見宿

手賀沼を四羽飛びけり小鰻刺

一枚の蓮の花片小舟ゆれ

蓮の田へ白波立てて進みけり

蓮見船送電線の弛みをり

風に乗り塩辛とんぼ蓮見舟

葉間より都会の見ゆる蓮見舟

涼風や蓮見の宴象鼻盃

磯目健二

広葉あり巻葉あり蓮の青疊

花蓮茎高に咲き葉を統べて

水無月や紺碧の空白い雲

船寄せて蓮の香りを深々と

ひとひらの花びら寄り来る蓮見船

蓮見船浄土の池を漕ぎめぐり

芙蓉咲いて秋のけはいの目にさやか

田宮敦子

白鳥の一羽汀にボート小屋

鰯の目地に縋りつ揚羽かな

眩暈のアスファルト来て蓮涼し

人間も管より成れる象鼻杯

てんでんに一つ年寄る蓮見舟

菊田ひろ子

行く夏をなつかしむかな蓮の花

命さえ絶え絶えなりき暑さかな

蓮の花湖面にわたる風涼し

武者昭七

飯田孝三

谷口みち子

平成の終りの今夏熱列島

蓮の花清らに咲けり手賀の面

一句鑑賞

増田陽一

蓮酒を沼の傾くまで呷る

宏之助

今夏の蓮見は酷暑ながら風爽やかな中の恒例の「象鼻杯」であつた。不安定な舟上で 茎を啜えて吸おうとする身体も傾き、相対的に沼が傾くのか、「呷った」ので相当な酩酊のせい、蓮酒の興を伝えて満点の句。

炎昼の浮棧橋を馳走す

宏之助

「熱中症注意」の報道続きのこの夏、船に乗り込む前の浮棧橋を馳が走つた。他の誰もこれを見なかった。滅多に見られない吸血性の妖獣イタチの疾走。「炎昼」「浮棧橋」の設定が良く、事実だけを述べながら白昼夢のごとく真昼の光景を捉えている。

翡翠の船頭ひとり見たといふ

みち

これも見たのは一人だけと言う。この鳥は手賀沼では稀ではないけれど真夏は少ないのか。船頭さんは目が利くのであろう。「ひとり見たといふ」の措辞に前句のイタチ同様、身近な自然の簡単に全容を現わさない奥深さを知るのである。この日、船頭氏の挙げた鳥類は、川鵜、翡翠、葦五位、小鰻刺などと多彩であつた。

日を浴びてO₂の泡を蓮の茎

高志

化学実験のような句である。事実、蓮の茎を切つて水に入れ、葉に日光を当てると茎の切り口から勢いよく泡が吹き出た。酸素だそうであつた。この句では「酸素」でなくO₂と表記したのが珍しく、実験のわくわく感が出ている。科学用語など俳句に合わないという人には、宮沢賢治など引用して見せたい。賢治の詩では稲のことをオリザ（稲の属名）と言つたり、枚挙に暇がない。

人間も管より成れる象鼻杯

孝三

動物体の原型として管の両端に口と肛門がある図式がある。その管である人体が長い管状の蓮の茎を啜えて繋がっているさまが浮かんできて、滑稽且リアルと言おうか。こんな蓮酒の句は絶無だったと思う。

蓮見舟浄土の池を漕ぎめぐり

昭七

花蓮の群生に舟が入ると、視界は蓮だけとなるのだ。浄土の如く、という連想だけなら仏教徒にはありきたりの観念であるけれど、掲句ではまこと浄土の池と「観じて」いるらしいのである。「漕ぎめぐり」はまさに浄土に浮き漂う心地であらう。

一句鑑賞

武者昭七

象鼻杯ごくごくと飲み昇天す

宏之助

象鼻杯はすでおなじみ。あの細く長い茎では「ごく

「ごく飲む」というわけにはいくまいがいかにも作者らしい豪快な飲みぶりがつたわってくる。「昇天」も大げさだがその字のとおりまさに天国に遊ぶ恍惚感と満足感が伝わってくる。

てんでんに一つ年寄る蓮見船

孝三

蓮見船に乗り合わせた仲間たち。ふと気が付くと髪がまたひとつ薄くなっているようだ。それぞれの一年はそれぞれの一年。それぞれにいろいろのことがあるのだ。「てんでんに」の一語に悲しみが匂う。

沼にゐて海の匂へり小鰐刺

陽一

「沼」は目の前の現実の世界。小鰐刺の遊ぶ海辺は思い出の海浜か幻想の海辺か。二つの情景がまじりあい重なり合う。風景とは何かを考えてしまう。

一句鑑賞

光 みち

日を浴びてO2^{酸素}の泡を蓮の茎

高志

蓮の群生地は蓮葉の勢力に圧倒されましたが、その勢いの源を船頭が科学的に明かしてくれました。私達は小学生になったみたいに聞き入りました。光合成の実験。蓮葉を日に当てると水を入れたペットボトルに浸けた蓮の茎から泡（酸素 O₂）がぶくぶく激しく出てきます。それを日陰の幌の下に入れると泡は出なくなります。まさか船頭さんが実験をしてくれるとは思ひもよらぬこと

でした。即俳句にされた作者にも驚嘆しました。

一句鑑賞

磯目健二

花弁のゆるゝ三日の蓮の花

高志

蓮見船の船頭によれば蓮花のいのちは四日とか。明日は散るいのちの極みにある花の花弁が、ゆらゆらと風に揺れている。盛りの美の儚さをよそに今を無心に咲いている。

花蓮茎高に咲き葉を統べて

ひろ子

水面の浮き葉をかき分け伸びる茎から巻葉を中空に広げ、その広葉の中心にすつくと立ち上がって咲く蓮の花。まるで侍女達を従えた後宮の貴妃のように。「抽んでて宙にとどまる蓮の花（手塚美佐）」の句が思い浮かぶ。

日を浴びてO2^{酸素}の泡を蓮の茎

高志

蓮の茎は日光に敏感に反応しつつ空中より取り込んだ酸素を根に送っている。試みに茎を切ってコップの水に漬け日光に当てると、茎の穴から酸素の泡がぶくぶくと湧く。その自然現象を化学記号で表現して見せたのは、いかにも科学者の作者らしい諧謔であろう。

しらじらと葉を翻へし蓮の沖

陽一

蓮沼に風が立つと青蓮葉が一斉に裏返って白い葉裏が波のように動くのが一望のもとに眺められる。沼風の動きと縹渺たる沼の風景が目に見えかぶ。

蓮見船浄土の池と漕ぎめぐり

昭七

古来から蓮は妙法蓮花とも呼ばれ、浄土の花に譬えられてきた。浄土の池といふべき蓮の群生地に沖から船を漕ぎ入れて、花を求めて回遊するのだが、桜花の花見とは異なり神聖な仏花を観照する気分がどこかにある。

沼にゐて海の匂へり小鰯刺

陽一

内陸の沼に飛来するコアジサシを見て海浜に居るような気になったのである。手賀沼は利根川下流に繋がり河口はそれほど遠くない。「海の匂へり」で海浜の鳥が沼と海の交叉するイメージのなかを飛んで、西洋詩のような瀟洒な印象を生む句となった。

象鼻杯ごくごくと飲み昇天す

宏之助

蓮の葉を茎ごと切りとり葉の底に穴をあける。葉を杯にして酒を注ぐと、穴に通じる茎がパイプになって先端から酒が飲める。傍目の似ていることから象鼻杯という。蓮見船で振る舞われた蓮酒を牛飲し忽ち酩酊。愛すべき天衣無縫の酒客ぶり。昇天のとき南無妙法蓮華經と唱えたかどうか。

蓮見舟吟行録

光成高志

連日35度の猛暑を記録していたので当日の暑さが気がかりで、我孫子駅に敦子さん、ひろ子さんと同乗して車で小池ポートまで行つた。初参加の矢口みち子さんこ

夫妻がお待ちでした。今回は以前の場所より少し西に寄つた小池ポート場から出船。こちらが蓮見舟の本家とのこと、船頭も氣立てのよい若者でした。乗場の待合室には例のごとく魚拓が飾つてある。幸一さん興正さんが来られないので皆で心配したが、時間通り出船。沼の上は照り返しがなく風が程良くあつて涼風を頬に感じながらの船上に皆嬉々たる声あり、オダ場を過ぎ大橋を潜り蓮の群生地に入つていく。それまでに杭上の川鵜が句読点のように見えるのは故嘉久さんの句の通り。蓮の葉を分けて入ると早速象鼻杯を挙行。もうやるんですかという船頭の声が聞えたが、彼も協力して蓮葉を伐つて呉れる。皆少しづつだが蓮の象鼻を口に咥えた。残つた酒は上戸の宏之助さんに私が全部お注ぎした。近くにビーチパラソルを掲げた船はへら鮎釣舟、遠くへ見える赤い領巾は東大の蓮の間引きの試験域の目印とか、蓮の花は開いて四日目に散るとか、この船頭は蓮見に詳しく氣の利いた若者である。結構風が強く丈の揃つた蓮葉は皆裏返つて裏葉の白を見せている。鳩の浮巢もあるとの話しの後に、船頭の蓮の茎の酸素の泡を見せる。パフォーマンスがあり、皆感心して見た。カヌーが一艘手を振つて過ぎ、駅前のケヤキプラザの展望室が見えるとかの案内もあった。ひろ子さんはタブレットで盛んに撮影して居り又誰かと交

信している中で一時間の航海を終えた。

俳窓評論纂

* 6.26 朝日の文化文芸欄に源氏物語 現代の視点で再発見

見 の見出しで英訳ウエリーの The Tale of Genji を邦訳した俳人の毬矢まりえさんと詩人の森山恵さん姉妹のコメントが載った。心理ドラマやフェミニズムの側面から捉え直す動きとして紹介されている。林望さんは自分の訳を改めて謹訳源氏物語を刊行中だ。普遍的な男女関係が描かれているのも時代を越えて読まれる理由だ。源氏物語研究の第一人者、藤井貞和東大名誉教授は、宮廷で働く女性の、同僚にも話せない苦悩や心理を、架空の王朝の物語にして共感を得たと語る。身分が低い空蟬や明石が活躍すること、末摘花への源氏の誠意ある態度にも注目。女性の尊厳を守っている。ある種の思想表現ではないか。現代から読み直し、特にフェミニズムの視点に期待する。清少納言、和泉式部、赤染衛門らライバルによる批判も聞こえ、よい刺激になったのではと分析する。(今朝目覚めてうとうとする間に紫式部がどういう積りで源氏物語を書いたのかを考えていた。起きて新聞を開くとこの記事男女の恋愛など表向きは考えられなかった時代に男女関係はかくあるべきと式部の頭で考えた理想を書きたかったのではないか。それは切実でほんとの気持なのだから、男も女もそれを読んで反芻し

現代まで読み継がれてきたのではなからうか。宮廷でのことなので日々の生活が皆美しいし、自然に従う行事などの日本文化が綿密に書かれてあることも加担して、日本人の良き根源をみる思いがしたのではないだろうかと思った。)

* 朝日 7.8 の文化文芸欄にオウムを生んだ社会は今 と大きな見出しで二人の社会学者の話が載った。一方は今の霞が関に見られる「エリート」の迷走の出発点だったと言える、一方は、虚構の時代の果ての出来事であったのだと自説を述べている。後者の大澤真幸は虚構すなわち妄想は世界最終戦争(ハルマゲドン)について触れている。その一人は死刑に処せられた・・・と思ったら大間違い。今日オウムのような集団が現れないのは、誰もが、近い将来ほんとうに破局が訪れ得ることを知っているからだ。このまま行けば大丈夫、と思っている人はほとんどない。現状のまま続ければ、日本はおろか世界は地球は破局的結末の到来を避けられない。その様相はもうちらつと見えているのに、私たちは、破局を回避するという最小限の条件を満たす理想社会への道すら見出せない。かつて一人の妄想だったことが、今や、万人の予想のうちにある。事態はましになったのか？と結んでいる。(どうしても一筆書いておきたい。ハルマゲドンという洞窟が南アフリカにあつて、先に日本の若い女性が取材に中に入ったのをBSプレミアム

で放映していた。巨大隕石の衝撃で岩石に入った亀裂が洞窟になっているのだ。金鉱石が残っているのもその所為なのだ。当地の学者が日本のそのことを知っていて、それこそこの洞窟はハルマゲドンと云いますと言った。現在は科学が発達して何でもかんでもその思想で考えてしまう。それによると4億年後には太陽が膨張して太陽系を呑み込みその後爆発して消滅すると言われている。そんなに経たないうちに地球が熱くなつて生き物は皆死んでしまう破局が来るに違いない。太陽月や星を眺めて人間を考え考へて宗教が成立したのであろうし、悟りを開いたとされる始祖たちは皆悉く宇宙

をわがものと出来た人間ではなからうか。無論自らの頭脳で教理を組み立てることができた人間ではなからうか。自然のものに皆神が宿ると信じた日本の古人の心は誠に尤もなものだと思ふ。仏教が入つて来て山川草木悉皆成仏さんぜんそくしつせいぶつもその流れの中にある。日本人が漢文によつて漢字の影響を受け、近代になつて西洋思想の影響を受け現代もその中であつて、本来の古人の心を失いつつある。それをどうしてくれるのだと、自分流に考へて開眼した文学者が日本にはゐた。今明治維新150年とか言つて話題の西郷どんも西洋化に苦虫を噛んでいたのではないか。鷗外・漱石の二先輩もそれに苦しんだのだし、戦後は三島由紀夫が身をもつて示したのではなかったか。序に、今テレビ俳句で人気番組を受け持っている夏井いつきも日本人一億人が皆俳人になればいいと言っている。長谷川権の一億人の俳句なんていう本を出したのも今の流行に

乗じた動きだろう。俳句はそんなものではないと思ふが何かに役立てようと思つてしまふらしい。

* 7.10 精神世界無関心な私たち 寄稿 高村薫が載つた。文化文芸欄である。七名の一度の死刑が執行されたことの意味を言葉にする努力を放棄したままこの日を迎えた絶望を縷々書いている。「形骸化が著しい伝統仏教の現状に見られるように、日本人はいまや宗教と正対する意思も言葉も持っていない。この精神世界への無関心は、理性や理念への無関心と表裏一体であり、代わりに戦後の日本人は物質的な消費の欲望で人生を埋め尽くした。地道な言葉の積み重ねを失つた社会で、若者たちの求めた精神世界が既存の宗教でなかったのは、いわば当然の結果だったと言える。彼らは伝統仏教の迂遠な教義と權威を拒否し、手取り早いヨガの身体体験に出会つて社会に背を向け、疑似家族的なカルト教団に居場所を求めたのである」云々。(私は心筋梗塞になりかけて、心臓に意識を向けるようになった。通っているプールではスタジオの活動があり、それにも参加できることを最近知つて、人のすすめがあつて、太極拳をはじめ、ヨガをはじめた。今の月謝でこれにも参加できることを知るまで十年経つていた。そういう一途な思い込みの男であつたことはさておき、無心に身体を決まった型で動かすことの心地よさを知つた。今七十六歳になつてからである。ヨガは身体を動かすが、

その前段階の瞑想はただ、呼吸に意識を向けることのみ、呼吸を観る、ただそれだけ何も期待せず、何も望まず、ただ淡々と呼吸に気づいていく。歩いていても出来るし、寝ていてもできる。しばらくしたら、敏感な掌がビリビリするらしい。背骨に沿って微細な感覚が昇って行くらしい。らしいと書いたのは私はそこまで感じたことがまだないからである。)

* 7.14 オピニオン&フォーラムに高橋源一郎の歩きながら考えるとして、オウムとは何だったのか、教団の施設があった旧上九一色村などを訪ねて寄稿している。麻原の著作を何冊も読んで自分の頭で考えた。どの本もみな同じ断言・断言・断言。おれは正しい。言う事を聞け。

このバカみたいな言葉にみな引かかったのだ。教祖を絶対としてその指示に疑問をもたず、ひたすら実行することが修行だと考えていた。だが、戦前つい70年前はそうではなかったか。麻原が行った長大な意見陳述の最後にこう発言している。「第三次世界大戦で敗れてしまった結果もう日本がないというのは非常に残念です・・・これをエンタープライズのような原子力空母の上で行うということは、非常にうれしいとか、悲しいとか、特別な気持ちで今あります」(降幡賢二「オウム裁判と日本人」)その言葉は麻原の迷惑を超え、わたしたちの喉に小骨のように突き刺さる。こう聞えるからだ・・・あの戦争で

わたしたちの國の十万倍もの日本人を死に追いやった日本国よ、おまえたちの責任はどうなったのか？著者には連合赤軍派に知人がいて誘われたことがあったが、その誘いに乗らなかった。なぜか。彼らも彼らが正しいという理論で著者に説明した。それは正しいように見えたが少々息苦しかった。大切にしたい自分の考えを気にしてはくれないように思えた。即座に否定することはできなかった。オウム事件はどうか。戦前は、天皇に忠誠を誓うのが正しいことだった。戦後は否定され今度は物質的に豊かになることが正しいとされた。この正しいことは時代によって異なるが、自分の考えより皆が支持する正しい考えが優先される社会のあり方は変わらない。だとするならば、麻原を処刑しても社会は、自分とそっくりな、自分を絶対正しいと主張する別な麻原を生み続けるような気がする、と結んでいる。

* 7.18 文化・文芸欄にオウムとは宗教研究者の模索 が載った。国学院大の井上順孝名誉教授(70)の証言が載った。最初皆二の足を踏んでいたが、2005ごろから研究プロジェクトの書籍化が進んだ。しかし定型的な解明とは言えず今後の研究の足場の位置づけだ。上越教育大の助教 授、北大の櫻井教授のコメントを載せている。いずれもおさなりでこれが研究者のコメントかと思わせる。(今月

はオウムの関連記事が多く掲載された。高橋源一郎と大澤真幸のオピニオンが一番真面目だ。ここで私が思ったのは、オウムの信者たちはどうも三島由紀夫の豊穣の海四巻を読んでいないなと思った。彼らの信するところがどうも見ても浅薄である。三巻がいいが、二巻が直接的だ。神風連思想の若者に書いた手紙がある。これは三島由紀夫の考えと思われるので、ここに書いておく。「ただ歴史を学ぶには、一時代の一部分にだけ目をとられず、その時代をその時代たらしめた多くの複雑な相矛盾した諸因子を万遍なく検討し、一部分をしてその所を得しめ、その部分に特殊性を与えた諸要素をひとつひとつ考究し、以て全体的な、均衡のとれた展望の裡に、これを置いてみる必要があると思うのです。私にはそれこそ歴史を学ぶことの意義だと思われる。なぜなら、いつの時代でも、現代というものは、一個人の目に映る範囲が限られており、その全体像を把握することは甚だ困難である。それならばこそ、歴史の全体像が参考ともなり鑑^{かがみ}ともなるのであって、現在の時々刻々の部分的世界像に生きる人間が、時を隔てた歴史によって展望が可能になった全体的世界像を援用し、そのおかげで自分の管見を匡^{ただ}すことができるのです。それこそ歴史に対する現代人の喜ぶべき特権なのです。」誠に親切丁寧です。）

受贈誌（平成30年7月号）

鈍色の微光放ちて蝸牛（彩141号）

金輪際^{さう}に動かず蝸牛（Ⅱ）

平野ひろし

〃

風葬の後の鳥葬かたつむり（Ⅱ）

ヒマラヤの石楠花の紅サリーの緋（Ⅱ）

キヤタピラの落とす黒土春の土（Ⅱ）

花ミモザ百間塀を溢れゐて（Ⅱ）

イルカシヨ一宙に旋回初燕（Ⅱ）

福寿草八十歳の誕生日（Ⅱ）

和菓子屋の店の中まで花吹雪（Ⅱ）

桐の花峽十軒の集会所（Ⅱ）

棚の下アロマセラピー藤浄土（Ⅱ）

また次の迷子放送飛花落花（Ⅱ）

修二会果つ地に闇空に柄杓星（Ⅱ）

東京クラブ（7月号）

旅始め湖西線より虹の立つ

新樹光鈴の音高く巫女の舞ふ

梅雨茫茫見馴れし町のうす黒き

夏つばめ土蔵造りのパン工房

芭蕉のかるみ以後（46）

先月号では田中桐江を少し紹介した。桐江が芭蕉に莊子を講じたという芭蕉翁編年誌にその日記が書かれていたからである。その日記は見つけることはできなかったが、大正12年に書かれた田中桐江伝を読んでみた結果

〃

窪田かつ江

〃

宮川喜代子

小泉博

上田とし枝

佐藤恵子

平山三郎

河端不二子

茂木つや子

貫名弘子

栄

武子

璃子

文男

光成高志

元禄二年芭蕉に莊子を講ずと書かれてあつて、翁編年誌の延宝八年と年代が合わない。その年桐江は13才でまだ江戸に来ていない。桐江が江戸に来たのは天和三年時に年十六とあつたから、その年に芭蕉に会つておればそういう事もあつただろうと思われる。翁編年誌の天和三年暮れに伊予松山の俳人が送りし歌仙一卷に讃を添ふ、とあつて、その讃が書かれてある。其中身が莊子を次のように引用している。伊予國松山の嵐はせをの洞の枯葉を吹て、其聲歌仙を吟ず。噫寥々刁々たる風の音玉をならし、金鐵のひゞき、或はつよく或いは和らかに吹て、且人をして泣しめ、人に心をつく。萬竅怒號、ひゞき替て、句毎の意味各々格別也。只これ天籟自然の作者、芭蕉は破れて風颯々。江上芭蕉散人崑崙

これは、雪しやれて翁閑けん芭蕉洞 井海 と云句にて、一卷を送りし時の嘆美なりと云々。

最後の崑崙は○と□で囲まれた印である。金鐵ひゞくは秋陽脩、秋聲賦にあり、後半は莊子、齋物論篇二に、夫大塊噫氣、其名爲風、是唯無作。作則萬竅怒號而独不聞之寥々乎。……厲風濟則衆竅爲虚、而獨不見之調々、刁々乎、とある。(夫れ、大塊タイカイの噫氣アイキは其の名を風と爲す。是れ唯作おることなきのみ。作おれば則ち萬竅怒號バンキョウドゴウす。而なんじは独り之の寥々

リユウリユウ たるを聞かざるか。・厲風レイフウ 濟めば則ち衆竅シユウキョウも虚と爲なる。而なんじ 独り之の調調チヨウチヨウたると之の刁々チヨウチヨウ たるを見ざるかと。) 中が省かれているので意味が分りにくい。全訳は(そもそも大地のあくびで吐き出された息、それを風という。この風は、吹き起こらなければそれまでだが、一たび吹き起これば、すべての穴という穴が激しく音をたてはじめる。お前は、その音を聞いたことがないか。山の木立がざわめき揺れて、百囲かえもある大木の穴は、鼻の穴のような、口のような、耳の穴のような、研ますがたのような、杯さかすきのような、臼のような、深く狭い窪地のような、広い窪地のような形のものに風が吹きあたれば、水のいわばしる音、高々とさけぶ音、するどい声で叱りつけるような音、吸い込むような音、金切り声で叫ぶような音、泣きさけぶような音、こもった音、咬とおほえする音がして、前のものが干うとうとなると、後のものは號ううとこたえる。そよ風のときには小さく和たえ、つむじ風が舞いあがるときには大きく和たえる。そして大風一過して天地がもとの清寂に帰ると、もろもろの穴はひっそりと静まりかえる。お前はあの、風の中の樹々が、ざわざわ、ゆらゆらと揺れ動くさまを見たことがないか) 秋陽脩の秋聲賦とは、「秋陽子方夜讀書、聞有声自西南來者、悚然而聽之

曰異哉、初析瀝以蕭颯、忽奔騰而碎湃、如波濤夜驚風雨驟至、其觸於物也、縱鏦鏦金鉄皆鳴、又如赴敵之兵御枚疾走、不聞号令、但聞人馬之行声、予謂童子此何声也、汝出視之、童子曰、星月皎潔明河在天、四無人声在樹間、予曰、噫嘻悲哉、此秋之声也、胡為乎來哉、蓋夫秋之為狀也、其色慘淡、煙霏雲斂其容情明天高日晶、其氣慄冽、砭人肌骨、其意蕭条山川寂寥、故其為声也、淒々切々、呼号奮發、豐草綠縵而爭茂、佳木葱籠而可悅、草弘之而色變、木遭之而葉脫、其所以摧敗零落者、乃一氣之余烈、夫秋刑官也、於時為陰、又兵象也、於行為金、是謂天地之義氣、常以肅殺而為心、天之於物春生秋實、故其在樂也、商声主西方之音、夷則為七月之律商傷也、物既老而悲傷、夷戮也、物過盛而当殺、嗟夫、草木無情有時飄零、百憂感其心万事勞其形、有動乎中必搖其情而以思其力之所不及憂其智之所不能宜其渥然丹者為槁木黧然黑者為星星、奈何非金石之質欲与草木而爭榮、念誰為之狀賊、亦何恨乎秋声童子莫对、垂頭而睡、但聞四壁虫声唧々、如助予之歎息。」である。先の桐江の墓碑のような漢文である。訓読は、欧陽子の夜に方あつて書を読むに、聲こゑの西南より来る者有るを聞く。悚然しょうぜんとして之を聴いて曰く、異あやしいかな。初め漸瀝せんれきとして以て蕭颯しょうさつたり。忽ち奔騰ほんとうして碎湃さいはいたり。

波濤の夜驚き、風雨の驟とつかに至るが如し。その物に觸るるや、縱鏦鏦そうさつとして、金鐵きんてつ皆鳴る。又敵に赴くの兵の、枚はいを銜くはみて疾走し、ただ号令を聞かずして、但人馬の行聲こうせいのみを聞くが如しと。予童子に謂う、此れ何の聲ぞや。汝出でて之を視よと。童子曰く、星月皎潔せいつこうけつにして、明河めいか天に在り。(以下略) 意識を全部示すと長いので省略し解説の一部を書く。自然と人生の密接な結びつきを叙述して行き、自然現象と関連して人生の盛衰榮枯の詠嘆に拡がるのであった。この詩人のこの深い悲しみを、自然の推移に従つて生きるという人生観によつて救おうとしたのである。これは陶淵明の「歸去來辭」にも見える、「化に乗じて以て尽くるに歸す」という思想と同じである。いわゆる「自然哲学」ともいうべき、中国伝統の処世観であろうが、そこにまた宋代の説理を主題とした、散文賦の特性が見いだされるのである。しかもこの賦は情景描写にすぐれていて、はじめに秋風の音を、風雨や波浪、或いは人馬の音かと疑つて、童子を戸外に出して見させると、夜空は晴れて人影も見えず、ただ樹間に鳴る風の音であつたという、一種の技巧振りの大きな表現は、最後に至つて、欧陽子が語り終つた時には、童子が答えもなく、頭を垂れて睡り、虫の声がしきりと続いて、詩人の嘆息を助け

るように聞えているだけであった、と結んでいるのと首尾一貫している。そこにまた秋の夜のいつしか更けて、推移した時間の経過がたくみに言い表わされている。こまでは福山誠之館同窓会のブログからコピペさせて貰った。欧陽脩は北宋の政治家、学者（一〇〇七～一〇七二）である。芭蕉の讃を訳すと、伊予の國の嵐がばせをの洞の枯葉を吹いて、その声が歌仙を吟ず。りゅうりゅうちようちようとい音玉を鳴らし、金属が鳴っているようなひびき、或いは強く、或いはやわらかく吹いて、且人を泣かしめ人の心を突く。ばんきようどうごうひびきに替えて、句毎の意味各別である。只、これは風が物に当たって鳴る自然の作者、芭蕉は破れて風になつたのを翁はふさぐの井海の句は、雪に破れて芭蕉が洞になつたのを翁はふさぐのでしょう、という句であろうか。以上は芭蕉一葉集（大正十四年刊行）に拠った。ここからは筆者の推測臆断である。芭蕉は若い時の23才から28才までの六年間の年譜空白期間に既に禅学歌学漢学などあらゆる学問の出版本を読んでいたが、莊子を読み直そうと思つて桐江に一時面談したのではなからうか。一寸桐江から聴いてあれだけ莊子に傾倒するとは思えない。学問はそんなに簡単なものではない。長い間親しみ考え己を鍛えて前進しなければ身に付くものではないし、直感も冴えない

のである。虚栗の跋文で「李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を啜る」とみずから云つたように杜甫の愛読者であつた。当時杜律七言集解という本が京都で刊行されている。李白の詩にしても寒山詩にしても当時刊行されたごくいいなどの書物を読んで考え考え自分のものにしていったのであらう。芭蕉の凄い所は文意の本質を即座に理解でき自分のものとして文章に生かすことができたことである。短い芭蕉の文章には省略された広く深い思想があるのだ。そう思つて読まなければ読んだことにならぬ。

お便り広場（到着順、敬称略）

うつとおしい梅雨は心身共にいろんな思いを起こしてくれます。私が植えた植物は喜んで育っています。雑草も側で私も私もと憎らしく繁つております。会誌いたゞました。光成君ご夫妻の句に寄せられる熱い思いに触れ私にとつて難解な分野で、活躍の凄みを垣間見させていたゞました。鷗外の墓碑探しにあやかられた行動に思いの深さ執念を感じ大広寺訪問のお手伝いが出来ましたことにちよつぱり嬉しさも感じました。詠まれた句に接し奥様の郷里行きはお悲しみ事でしたやに伺い知り、お悔やみ申し上げます。青田に映える麦秋に目を奪われた記憶がよみがえってきました。人生いっぱいの感じ方を得ることは楽しみでもあり苦しみでもありますね。ど

うぞ健康に呉々もお氣をつけられますよう念じ上げます。
六月二十五日

加納綾女

光成君ご夫妻様 追伸…難しい漢字がいっぱいでも何回も読み直しました。私にはやっぱり草取りが似合っています。秋にはツタンカーメン、ささげを播きます。過日ご丁寧なお礼状そしてお写真をありがとうございます。ました。

拝啓 白金霞五月く六月号受取ながら失礼しています。長らく失礼していますが、お変わりなく暮らしているのかなーと推察しております。私は元気でいますが三月二十日の血液検査で（PSA）の数値が少し高くなっているの（4.7）再発の可能性があるので又ホルモン注射（リユプリン）を始めます。私自身何も感じないのにただ血液検査のみで告知するのは如何なものかと少し憤りを感じています。があまり知ったかぶりをせずに言われる通りにすべきかと少し反省をしています。誰しも年はとりたくない誰も老いたくはないしかし誰もが必ず年をとり老いて行くのだ正面切って病と向き合いこちらから仕掛けて行く位の気持で向き合って行こうと思っています。そのためには必ず老いて行く肉体の原理とその兼ね合せでかつての若い肉体が作った精神の関わりについて知ることです。それを踏まえて老いに関するさまざまな情報を

心得乍ら若い頃には無かった経験とそれを培って来た冷静さを以て老いを迎え討つことと考えます。取り越し苦労は禁物です。白金霞敏子さん母さんのこと色々と詠んでいます。が何かあったのかなーと感じています。白金霞発行の手助けになるのかどうか分かりませんがわずかなですが同封しております。家屋敷成長早く剪定す 松蠟梅 五月バベ山茶花木犀足元から切ればよいがそれもできない。地上1m位にすることだと思っている。（6.25 健三）
先ず松を次に蠟梅剪定す（みち添削）（先のみちさんの礼状に私の意見を同封しました。循環器の病氣は薬に死なれるようなので私は安心しています。亡父もそうだったのではないのでしょうか。）
紫陽花が色鮮やかに咲いているこの頃ですが、その後お元氣ですか。この度、白金霞六月発行八十八号を送っていただき有難うございました。みちさんの「手を振って母死に給う梅雨青し」を読んで驚きと母を見舞ったときのことを思い出しました。母の葬儀のときは、兄弟いここに会う機会をもつことができ、昔話と近況の話に一時を過ごすことができました。今は、疲れを感じることが多く、これは加齢もあつてのことですが、生活しています。どうかお身体には十分氣をつけられてお過ごしください。とりあえずお礼まで。

（6.27 昇）

暑中お見舞い申し上げます。小暑から立秋までが暑中

見舞を差し上げる昔のきまりのようですが、早々と昨日梅雨明けをしましたので、小暑を待たずのお見舞いでございませうが、猛烈な暑さの日々を聞き飽き、言い過ぎの熱中症にご注意を申し上げさせて下さいませ。東京クラブの山尾氏は六月二十二日リハビリ病院を退院、三月末より留守の居城に戻られ、七月十四日の句会にご出席可能となりました。一寸ころんでも三カ月の入院、大変なことです。白金霞六月号でみち様ご母堂ご他界と認識いたしました、そのまゝ日が過ぎ、お悔やみ申し上げます。中に今日となりました。お氣持お察し申し上げご冥福をお祈り申し上げます。(7.2 瑞子)

竹原のおかあさん亡くなられたそうですね。謹んでお悔やみ申し上げます。心からご冥福をお祈り申し上げます。97歳とは長寿でした。何かと思ひますがあまり出過ぎた親切はご迷惑と思つて何もしない方がよいと思つています。誰もが経験することです。私のことについてご心配ありがとうございます。2017/7/12.6～2017/11/7.3.4～2018/3/13.4.6～2018/6/19.1.8とつうことでリユースを止めて(ゾラデックスRLA108mgデポ12週～13週間持続型)副作用の治療ガイドももらっていますので、大丈夫です。注射がいやと言われれば現状のままで様子を見るしかあ

りませんまだまだ元気でおられるので注射した方がよいと思いますよまあいろいろ言つても仕方ありません先生の考えに従いますとしました。この歳まで生きた。まあいいじゃないか。白金霞会計報告ありがとうございます。無理せずに休み乍らやつて下さい。又折を見て送ります。急いで書きました。ご判読下さい。(7.4 健三)

西日本の記録的な大雨で各地で連日災害が相次ぎ今朝のテレビでは広島でも福山、竹原、三原での被害の状況が報じられています。ご夫妻のご心配の程が察せられます。ご家族、ご親戚の方々のご無事を念じ申し上げます。豪雨が収まれば、つづく復旧のことが察せられますが、まづは右災害お見舞いまで。不(7.7 孝三)

六月号掲載のみちさんの御作によりますと、お母様を亡くされたご様子、遅ればせですが、お悔やみ申し上げます。世間では天寿を全うなども云われますが、親にはいつまでもいて貰いたいものです。心からご冥福をお祈りいたします。さて、20日の蓮見舟吟行まだ乗舟の余地がありましたら参加させていただきたいと思ひます。長い酷暑になりそうです。御身体大切に健吟下さい。(7.13 孝三)

先日は猛暑にもかかわらず楽しい一日でした。幸一さんの欠席が気がかりでしたが無事を祈ります。(7.21 昭七)

先日はお世話になりました。酷暑ながら沼の上は爽やかな風あり、快適な蓮見舟でありました。鑑賞文にも書いたけれど船頭さんはさすがよく目が効き、沼を知悉しているので鳥の指摘など有益でありました。連日「熱中症注意」の報道ですお互いに気をつけましょう。何か手紙を書けと言うから要らないことまで書きますが、前日には東京スカイツリーなる処に始めて行きました。数年来、奥本さんの関係している「大昆虫展」があつて、今年は行くと約束してしまつたからです。昔は夢のようであつた熱帯産の巨大カブトムシやエジプト産のフンコロガシなどの生きて動いているのが見られました。蝶も熱帯産の超豪華美麗種ばかりの展示。今の子供はプラモデルやパソコンゲームの流れとしてそれらを喜んでいる傾向があり、僕らの年代のささやかな感動とは少し異質なものを感じます。その前の週は上野西洋美術館でやつてゐる「理想の人体、ミケランジェロの傑作。」と銘打つた展覧会を見ました。この夏は昆虫展でみたいものと二つあります。来週から当マンションで10年に一度の大修理工事があり、窓の外に足場が組まれるので銅版画の製版がしにくくなり、この夏は絵の下書きのみです。この間は幸一さんの連絡なく高齡なので元気で居られるかと心配。・・・さて、僕は元来怠け者なので最も好きなの

は「夏休み」であり、夏は身体の調子もいい筈ですがこの老齡、何とか耐えて生き延びたいと思います。近作に一句「老残にあらずや永遠の夏やすみ」それでは御兩人ともどうかお元気で。草々。

我孫子日記

6/15	例会
6/19	* 北総病院
6/20	SOA
6/21	*2 悦子さん三回忌
6/24	墨絵&ヒタ タカコノ歌
7/14	*3 浄名院万灯会
7/17	野田源氏
7/20	例会(蓮見舟)

*心臓はよし梅雨晴れて雲浮かぶ

病院に入る道路の草を刈る

馬運ぶトラック黄に塗り栗の花

*2 梅雨の忌やかへつて我孫子さす古郷

*3 天蓋の南無阿弥陀仏万灯会

編集後記

パソコンがウイルスで風邪をひき入院していましたのでいつもより遅れてのお届けになりました。夏休みに入ります。九月にお会いしましょう。

高志
" "
" "

白金霞七月号(通巻第八九号) 平成三十年七月二十九日発行
編集・発行人 光成高志 発行所 二七〇・一二九 我孫子市南新木二四・二七
表紙の題字…加納綾女 同写真は平成三〇年七月二十九日の白金霞